

スイートピー切り花における花持ちの品種間差

○中村薫<sup>1</sup>・福元孝一<sup>1</sup>・明石良<sup>2</sup> ( <sup>1</sup>宮崎総農試, <sup>2</sup>宮崎大学フロンティア科学実験総セ)

Difference of vase life in Sweet pea (*Lathyrus odoratus* L.) cultivars

Nakamura, K., K. Fukumoto and R. Akashi

[目 的]

宮崎県は、冬季の豊富な日照条件を生かしたスイートピーの栽培が盛んである。栽培されている品種数は豊富でその数は200を超えている。スイートピーはその花持ち日数が短いため、切り花後に鮮度保持剤であるSTSを処理した後に出荷されている。STS処理によりその花持ちは飛躍的に向上するが、花持ち日数はスイートピーの品質に大きく影響するため、花持ちの優れた品種が求められている。ここでは、そのような形質をもった品種の育成に資するため、STS処理を行わない場合の花持ち日数の品種間差について調査したので報告する。

[材料及び方法]

材料は、2007年9月11日に播種した96種類の品種および系統の切り花を用いた。冬咲き系品種は2週間、春咲きおよび夏咲き系品種は4週間の2℃暗黒下で種子冷蔵した後に播種した。栽培施設はP0系フィルム被覆ハウスとし、最低夜温は5℃で管理した。

切り花の収穫は栽培期間終期で気温も上昇し、花持ち日数が減少すると思われる2008年4月14日および22日に行った。直ちに第1小花の小花柄から下部の花柄長を15cmに切りそろえ、蒸留水を入れたビーカーに生けた。切り花の収穫は小花数が4輪以上のものは4輪目が、小花数が3輪の切花は3輪目が開花したステージで行った。花持ち調査は宮崎総農試の花持ち調査室で行った。調査室の条件は温度23℃、湿度65%で蛍光灯照明の12時間日長とした。

生け花後は小花のしおれ程度を表1に示したステージにより1輪ずつ観察調査した。花持ち日数は収穫時開花していた小花数の50%以上である切り花あたり2輪がしおれた(ステージ5)時点とした。供試した切花本数は1品種あたり6本とした。

[結果および考察]

花卉のしおれは旗弁が翼弁側にしぼみ、しおれていく小花と花卉が開いたまましおれていくものが観察された。ほとんどの品種および系統の花持ち日数は2日から3日であった。

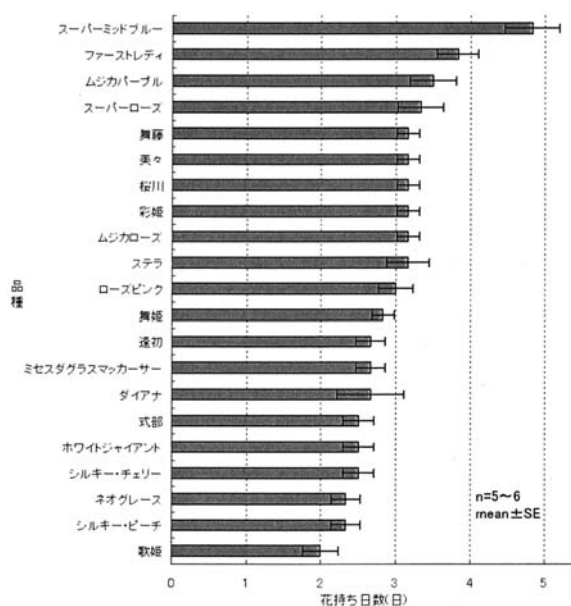
‘エリザベス’、‘歌姫’などは花持ち日数が比較的短く、約2日であった。また、‘ステラ’、‘ムジカローズ’‘桜川’などは約3日であった。

花持ちが最も長い品種は‘スーパーミッドブルー’で4.8日であった。次に長い‘ファーストレディ’は3.8日と1日の差があり、供試した品種の中で‘スーパーミッドブルー’は特に優れていた。

また、冬咲き系品種は花持ち日数が短い傾向であったが、開花特性上冬咲き系品種は栽培終期は株疲れしやすいためと考えられた。以上のように、スイートピーの花持ちは品種間差が大きいことが明らかになった。

第1表 開花のステージ

ステージ	内容
1	開花前
2	開花
3	満開
4	しおれ始め
5	しおれ
6	完璧にしおれ



第1図 スイートピー切り花の花持ちにおける品種間差